Title: 教団新報4865最終.eca Page:1 Date: 2017/08/07 Mon 16:24:05



# 教団新報

定 価 1部144円（本体133円〒共206円）
予約購読料 1年分 〒共 5,150円
紙代のみ 3,600円
振替 00140―9―145275
本紙を購読ご希望の方は、前金をそえて、お近くのキリスト教書店へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18
日本キリスト教会館内 電話03(3202)0546
FAX03(3207)3918
URL http://uccj.org
発行人 道家紀一
編集主筆 渡邊義彦
印刷所 株式会社きかんし

## 教区総会報告 2017年度 4

神奈川 議長総括

左から、佐野匡書記、三宅宣幸議長、古谷正仁副議長

## 17教区総会終了

### 「ハラスメント防止規則」再度差し戻し

神奈川教区

神奈川教区総会は、6月24日清水ヶ丘教会で正議員236名中170名出席で開催。

議事日程承認の際、日本基督教団信仰告白をすべての議事に先立って告白したいという動議が提出された。賛成反対の意見が飛び交う中、三宅宣幸教区総会議長は、常置委員会で本件が継続中の審議であることを示した後、本日の総会で告白するかどうかを議場に問うたところ、166名中66名の賛成によって動議は否決。議案資料にある執行順序通りに行われた。

本総会において最も時間が割かれたのは、ハラスメント問題であった。教務報告を承認する段階において、常置委員会における発言内容の問題性が指摘されることに始まり、第136回総会において、常置委員会付託とされたパワー・ハラスメントに関する訴えに対しての常置委員会の対応が問題とされた件では、常置委員会で組織された「六人会」の報告がなされた。

また、第135回総会において一度提出され、常置委員会差し戻しとなった、『ハラスメントの防止等』に関する規則」に関する件は、改正案が提示されたが、議場から規則制定には不十分との声が上がり、常置委員会に再度差し戻すことが動議として提出され、144名中110名の賛成で差し戻しとなった。

戦責告白50年を覚え新たな行動をおこす決議に関しては、「戦責告白のみで、教団信仰告白の言葉がない」、「信仰告白は前提にある。先達が残した戦責告白を積極的に支持することが必要である」、「今朝、その前提となると言われた信仰告白を告白する動議が否決されたことをどう考えるか」との声が上がった。138名中90名で可決。北村慈郎教師免職撤回及び教団において聖餐についての論議再開のための声明が、134名中85名で可決された。

（佐藤 進報）

## 17教区総会を終えて

教団総会議長 石橋秀雄

教区総会を終えて、印象に残った第一のことは、各教区ともに教勢の低下に伴う財政難の中で、懸命に教区形成に取り組む姿だ。

「教会無しには自分の生活は成り立たない」という信徒が多く、この信徒に教区の活動が支えられ、教区の連帯が深められていると教えてくれた教区。とにかく「礼拝する群れをこの町に絶やさないこと」と、同じ町の教会の合同を実現し、消滅の危機にある教会に希望を与え、教区の伝道力を高め、教区活動に活気を感じた教区。「無牧の教会にはしない」と、教師の収入によって負担し互助を充実させて支え合う教区。危機の中で独特の教区形成をしていることを知らされ、教えられた。

教団では「教区議長会議」を年2回持ちたいと考えている。2回目は一泊二日で12月に持たれる。他教区の活動を知り合う、理解し合うことによって教団の伝道力を高めることになるのではないかと、各教区総会を問安して希望を持った。

「教団の伝道力の命と力の回復―主の伝道命令に忠実に従う教会―」と教区総会への議長挨拶で訴えた。この訴えに対する批判の声は挙がらなかった。この訴えが聞かれていったという手応えを感じた。特に信徒議員の方々がうなずきながら聞いてくれる姿に励まされた。

教団の「伝道力の命と力の回復」は教団171の教会の出発点に立ち帰ること、「主の伝道命令に忠実に従って」、伝道者や信徒が血の滲むような犠牲と献身によって私たちの教会が設立されたこと、この出発点に立ち帰って「伝道力の命と力の回復を図ることが求められる」と訴えた。

「教団は議論のための議論をして何も進められない」との声に謙虚に耳を傾け、教団の伝道を具体的に進めて行きたいと決意を新たにさせられた。

**お知らせ**

教団年金局、事務局、出版局は、8月2・3・4日が夏期休暇となります。

総幹事事務取扱 道家紀一

## 日本基督教団 宗教改革500周年記念礼拝

### 礼拝をささげ18年3月まで続く記念事業を開始

礼拝堂一杯の会衆が共に賛美

6月22日（木）、富士見町教会を会場に、日本基督教団宗教改革500周年記念礼拝がささげられた。礼拝の司式者として、宗教改革500周年記念事業実行委員会委員長の岡村恒牧師（大阪教会）、説教者として、東京神学大学学長の大住雄一教師が立てられた。

礼拝には513名の出席者が与えられ、富士見町教会の礼拝堂に入ることが叶わなかった出席者もあるほどであった。

ヨハネによる福音書6章34節～40節をメインテキストにしてなされた説教は、「私たちはどうすれば神に義とされるでしょうか」と始められた。「宗教改革はカトリック教会の縛りを脱しようとしたゆえに、人間性の解放を目指したものだ、との理解があるが、それは誤解である。宗教改革は、どうすれば人間は永遠の命を得ることができるのか、どうすれば神の前で義とされるのか、それを問うたのであり、神の前での悔い改めのみが義とされる道であるとしたのだ」と続けた。

また、「ルターによる95か条の提題の第1条には、主イエス・キリストが、全生涯を通しての悔い改めの道を示されたことが提示されている」と紹介し、「それが今日の礼拝式に表れており、これはこの礼拝共同体の悔い改めの共有を意味する」と語った。

そして、「この悔い改めを生み出すのが福音であり、『わたしが命のパンである』との主の言葉にその福音が示されている。この福音を信じること。私の中にあるものを頼りにするのではなく、教会のために何かをするということでもなく、ただ神にのみより頼むこと、誰一人漏れることない救いのために、主イエス・キリストが十字架にかかって死んでくださったこと、このことを信じる者は神の前に失われない」と語った。

その後、日本基督教団信仰告白を告白し、日本基督教団が宗教改革の福音主義教会に連なる教会であることを確認し、続いて聖餐に与ることによって改めてそれぞれの罪の深さと救いの事柄を確信した。

礼拝の中では、桜美林大学クワイヤーによる奉唱があり、感謝会では、石橋秀雄教団議長、日本基督教団全国信徒会会長・望月克仁氏による挨拶があり、日本聖公会総主事・矢萩新一司祭が、「この礼拝に出席できたこと、聖餐に与ることができたことに感謝である。数え切れないくらいの様々な教派があり、同じ教派の中でも様々な考え方がある。そのような状況の中で、時に批判し合うようなこともあるかもしれないが、この宗教改革500年を記念するときを、これから教会がどう歩んでいくべきか、違いの中で、どこで一致して歩んでいくことが出来るかを考える契機としたい」と、来賓として挨拶をした。

（小林信人報）

Title: 教団新報4865最終.eca Page: 2 Date: 2017/08/07 Mon 16:24:09



# 2017年度 新任教師オリエンテーション

熱海を会場として２年目に

２０１７年度新任教師オリエンテーションは、昨年と同じ会場であるハートピア熱海において６月12日より14日までの３日間に亘って開催された。

新任教師の参加者は40名、６つの神学校とCコース、他教派からの転入教師という顔ぶれであった。各教区の教会に仕えている教師たちであり、年齢も様々であった。その他、教団三役及び講師、神学校教師、教師委員、担当幹事、職員が26名、合計66名が集って３日間の有意義なプログラムを共有することができた。

１日目の講演では、石橋秀雄教団議長により「48年の牧会は信徒に育てられた。牧師は信徒によって牧師となっていく。礼拝は奇跡であり、礼拝を楽しみ、礼拝を通して力強い伝道がなされていく。全教団的に伝道に取り組んでいく」ことなどが話された。

また、２日目の講演では、東野尚志牧師（聖学院教会）は「自分が召しを受けていることをいつも考えていないといけない。神に召された者として神がお遣わしになるところにどこへでもいく。神に召された者として自分の召しに対しては妥協せず、神の召しを信じて仕えていくことが尊い。教師として立てられたことを喜び、伝道者としての生涯を神の召しに応えて歩んでほしい」と熱く語った。

今回の「牧会講話」は、元総幹事の長崎哲夫牧師が担当した。教団教師としての牧会53年の経験を通して語り、「牧師は牧師との出会いによって育てられる。牧師は一人ではなくつながりの中で立たされているのであり、周りに先輩や同労者がいる。牧師は教会の信徒によって育てられるのであり、信徒が教会へささげた果実を感謝して謝儀として受けるのである。牧師は魂の一人一人への深い配慮と忍耐を持たなければ牧会者となり得ない。牧師はカウンセラーではなく、キリストの言葉をもって一人一人の魂の奥深くに入り込む人である。牧師は説教をもって牧会をする。説教が牧会であるということに妥協をしないで研鑽してほしい。牧者として教会の良し悪しをきちっとして、毅然とこの世で生きてほしい。牧師は強い意志をもって教会の立場を貫いてほしい。周りにいる弱い立場の人たちにキリストのまなざしをもって大切にしてほしい」と、新任教師への温かく深い示唆を与える講話だった。

さらに、「東北教区放射能問題支援対策室『いずみ』について」を保科隆東北教区副議長、「熊本・大分地震報告」を新堀真之九州教区書記によって現地の詳しい報告、課題と取り組みが紹介された。その他に、「教団の機構について」道家紀一総幹事事務取扱による説明、「教団の取り組み」では、「出版局」新藤敦局長、「年金局」薮田安晴理事長、「宣教研究所」野村稔委員、「部落解放センター」東谷誠運営委員長、「教師委員会」菅原力委員長、それぞれが説明した。

開会から閉会に至るまでの３日間、４つの礼拝を教師委員が分担した。開会礼拝は菅原委員長により「いのちの水を飲む」と題して説教がなされた。２日目朝の礼拝では「進め、歌え、祈れ」と題して宮川経宣委員、３日目朝の礼拝では「神が涙をぬぐわれる」と題して中村英之委員、そして、閉会礼拝は「遣わされた任地」と題して古旗誠書記が説教を通して参加者への励ましを語った。説教者一人一人が、厳しい環境の中での牧会の経験を通して、牧師としての喜びと希望を豊かに伝えた。

新任教師の遣わされた任地は、様々な配慮の中で導かれたものであり自分の意志で選んだ面もある。しかし、真実はそうではない。神が一人一人を選ばれ、遣わされたのである。「わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です」（創世記45章８節）。遣わされた教会とは、御言葉の示しているところである。そして、遣わされる神は、先立って働いてくださるのである。主なる神に信頼して教会の信徒と共に召しに応えようとしていくときに、神が実りをもって伝道を祝福してくださるのである。

参加者一人一人は、赴任したばかりの教会で緊張しつつ戸惑いながら必死に説教を準備し、礼拝と牧会に心を砕いている。この３日間は、お互いに不安をもって教会に仕えている同労者との出会いの場面でもあった。一人一人が祈られていることを再認識する貴重な機会でもあった。

分団での話し合いと全体のまとめでは、「自分の思い描いた良い『牧師像』に当てはめて息苦しさを覚えた経験」、「信徒とどう向き合ったらよいのかという戸惑い」などが述べられた。最後には、新任教師オリエンテーション開催への感謝と共に、教団における教師の継続教育への熱い期待が寄せられた。

３日間を振り返って感謝し合い、新任教師の一人一人を祈りつつ伝道地へ送り出して閉会した。

（古旗　誠報）

▼教区議長会議▲

# 教団伝道推進基本方針について協議

６月５日、教団会議室にて、今総会期第１回目の教区議長会議を開催した。出席者は、教団三役のほか教区議長16名（沖縄教区議長は欠席）で、教団伝道対策検討委員３名、予算決算委員長、教団幹事５名が陪席した。

この教区議長会議の開催は、今総会期第１回常議員会における教団伝道対策検討委員会設置議案の提案理由の中にも記されていたことであり、各教区における伝道の現状と取り組みを、まずはお互いに聞き合い、教団における伝道の進展の具体的な取り組みについて検討することを目的として開催されたものである。

最初に、今年度はほとんどの教区が改選期であったため、各教区議長が自己紹介をすると共に、各教区における伝道の取り組みや課題等について短く述べた。

その後、雲然俊美書記が、これまで２回開催された教団伝道対策検討委員会における検討内容について報告したほか、教団伝道推進基本方針の制定について説明し、全体で協議した。

教区の伝道の現状を聞き合うところから

協議においては、教団財政が危機的な状況にかいつつあることは理解しているが、そのことと伝道推進ということが結びつかない、主イエスの伝道命令に従うとのことであるが、もっと喜びの中で福音を伝えずにはおれないといった言葉が欲しい、教会の維持ということよりも、教会は他者のために存在するという視点が大事であるといった意見が出された。

続いて、佐々木美知夫副議長より、教団機構・財政検討小委員会を設置することについて説明がなされたが、これについては、教団における伝道推進ということと財政のことが結びつかないので反対であるとの意見が出された。

なお、石橋秀雄議長は、教団伝道推進基本方針の制定については、７月の常議員会で審議したいと述べた。

また、今総会期第２回目の教区議長会議の開催について協議し、お互いの意見をじっくり聞き合うために一泊二日で開催することとして、日程を今年の12月11日～12日とした。

（雲然俊美報）

## 教団伝道対策検討委員会

４月６日に第２回教団伝道対策検討委員会を、また、６月５日に第３回委員会を、教団会議室にて開催した。

第２回委員会においては、第１回委員会（１月30日開催）における石橋秀雄議長による教団の伝道推進のための発題と、それに対する意見等を踏まえた提案が石橋議長よりなされた。

提案の内容は、「祈祷運動－祈ろう－」（日本伝道推進の日を設けて祈ること等）、「信徒運動－伝えよう－」（伝道する信徒の養成等）、「献金運動－献げよう－」（献身の志が高められるように献金運動を展開する等）を柱として、教団における伝道の推進のために具体的な取り組みを進めるというものであった。

これに対して、「祈祷運動」についてはどのように展開しようとしているのか、宣教委員会や伝道委員会あるいは伝道推進室との関わりはどうなるのか、伝道する信徒の養成と共に伝道する牧師の養成が必要である、「献金運動」に関して一番大事なことは各個教会の経常会計の充実ではないか等々の意見・質問が出された。これらに対して石橋議長は、教団における伝道の推進のために教団全体において祈りがささげられ、献金がなされるような取り組みをしたいこと、そのために、教区議長会議を開催し、そこで各教区の現状を踏まえた意見や提案を述べてもらい、それをまずはお互いに聞き合うことから始めたいと述べた。

続いて、教団における伝道の進展を図るという視点から、教団の機構や財政を検討する小委員会を設置することとし、佐々木美知夫副議長を委員長に選任した。

第３回委員会においては、同日開催された今総会期第１回教区議長会議において、教団伝道推進基本方針の制定について協議したことが報告されたほか、教団機構・財政検討小委員会（佐々木美知夫委員長、小西望委員、佐久間文雄委員、予算決算委員長と総務幹事は常時陪席）を設置することを承認した。また、三役より「全国伝道推進献金」（案）の提案がなされ、協議をした。

（雲然俊美報）

Title: 教団新報4865最終.eca Page:3 Date: 2017/08/07 Mon 16:24:12



▼予算決算委員会▲

# 負担金減少、16年度決算を承認

40総会期第2回予算決算委員会が、6月8日、全委員が出席し、教団会議室で行われた。

最初に、道家紀一総幹事事務取扱より幹事報告があり、主に2016年度出版局決算の概要と会館地下倉庫の耐震補修が必要なこと等が報告された。

この後、2016年度第2次補正予算に関する件を取り扱った。この2次補正の主要な点は、収益事業会計のうち、当初はゼロであった会館室料が、耐震工事終了後の、各団体の再入居等により大幅な増収になったので、799万5千円の補正を行うというものである。協議の結果、この第2次補正予算を決定した。

次に、2016年度決算を取り扱い、この中で負担金収入が2013年度を100とすると、97・5に減少していることや、教団全体の活動を支える支出を縮小することが限界点に達していることが指摘された。そして、教団の財務体質が、年度内に特別な支出が発生した場合に差損に至る体質になっていることを、委員会としては、十分な注意をする必要があることを確認したうえで、この決算を承認した。

また、9月25～26日に行う全国財務委員長会議は、「伝道を支える教区財政」を主題とし、この中で、教区が抱えている財務の問題について、三教区の財務委員長には発題を依頼することとした。

更に、39総会期の委員会で決議し提案していた、出版局の会館再入居費用を出版局への貸付金にすることと会館3階の室料の金額が、出版局理事会でも承認されたため、この件についての「覚書」を取り交わすことになった。

そして、幹事報告でも報告された会館地下倉庫の耐震補修については、第1回委員会でも実況見分を行っていたものであり、約120万円の費用の見積もりが提出された。協議の結果、この地下倉庫耐震補修費用を妥当なものとし、これにつき2017年度補正予算で対応することを決めた。

（宇田　真報）

▼伝道資金小委員会▲

# 18年度運用指針・スケジュールを協議

各教区総会も終わり、40総会期第1回伝道資金小委員会が6月9日教団会議室にて開催された。佐々木美知夫委員長、高橋潤書記、米倉美佐男宣教委員長、小宮山剛伝道委員長、小西望東北教区議長、岸俊彦東京教区議長、黒田若雄四国教区議長で委員会を組織した。

2014年10月第39回教団総会にて決議された「伝道資金規則」によって、全教団的教区間互助が開始され3年目を迎えた。2017年度伝道資金は14教区から申請があったが沖縄教区、九州教区、大阪教区からは届いていない。現在まで、各教区が全体を配慮しつつ申請を行っているため、ほぼ各教区の申請通り実行されてきている。

2016年度の伝道資金運用報告を承認し、2017年度伝道資金運用状況について確認した。課題としては、本委員会は常議員会の下に設置された特設委員会として実務を担う委員会であり、前総会期より「制度全体の評価と展望を議長または総幹事が行うことが望ましい」と指摘してきた。今後の課題として常議員会へ検討を委ねることとした。

2015年度より伝道交付金及び伝道方策交付金では、実施に至らなかった計画の援助は全額返金とし、実施されたが1万円以上の誤差があった場合については返金することで運用していることを再確認し、この運用上の返金を全教区的に共有する必要を確認した。

2018年度伝道資金運用について協議し、2018年度の運用スケジュール、運用指針、審査基準について案を作成した。7月10～11日開催予定の常議員会へ向かい、2018年度伝道資金は、今年の10月6日まで申請を受付、10月12日の本委員会にて申請書の審査、10月常議員会にて審査報告および交付金額の決定というスケジュールを立てた。尚「土地取得貸付資金」の運用について協議し、現在の所原資が十分ではないので今年度も運用を見合わせることとした。

（高橋　潤報）

左より、岸、小西、米倉各委員
高橋書記、佐々木委員長、黒田委員

教師検定委員会

## 教師を立てる、教会を建てる

服部　修

日本基督教団が教師を立てることは、教団の教会を建てることと同じ意味を持っていると理解して委員会はその任に当たります。それゆえに教師試験は、入学試験や資格試験とは異なり教師としての召命が問われます。従って、試験は32総会期の議決をふまえ、日本基督教団信仰告白に基づいて行われます。今期もこの議決をふまえており

委員会コラム

ます。ここが曖昧になってしまいますと、教師の考える教会にはなりますが、教会の教会であることが薄れてしまいます。教師を生み出すことは、教団の生命線の一つでもあるのです。

具体的な試験は、提出試験、筆記試験そして面接試験が行われます。近年は面接試験を大事にするようにしております。それは既述のように、召命を問う、ということが試験の一番のポイントだからです。同様の理由で、検定委員会は他教派からの教師転入の審査も行っております。このことも教団の教師を生み出す大切な務めの一つです。

委員会は、7名によって構成され、それぞれが教会に仕えながらこの務めにあたります。試験期間中は教会を一週間にわたって留守にします。それが年に2回あります。その間、教会員が支えてくれているという信頼と祈りがあってこその務めです。重い務めですが、教師が生み出される現場に立ち会えることはこの委員会の大きな恵みであると理解しています。

（教師検定委員長）

▼社会委員会▲

# 福島、宮城にて委員会、研修を実施

第2回社会委員会が、6月12～13日に開催された。1日目と2日目午前、若松栄町教会にて協議が持たれた。

主として、全国社会委員長会議について協議。2018年2月26～27日に実施、会場は東京を予定。内容は、石橋秀雄議長より提出される「組織的犯罪処罰法改正に抗議し、同法の廃止を求める声明」に即しながら、その課題の共有等、学びの時を持つ。講師は後日決定する。また日本キリスト教社会事業同盟からの、本委員会への派遣委員について。原田史郎委員は任期満了につき、次回より伊藤信彦委員に交代することを承認した。長きに亘る働きに感謝したい。

1日目夕方、会津放射能情報センターにて、片岡輝美代表より、福島第一原子力発電所事故から6年、これまでの取り組み、現状、今後の課題について、話を聞いた。安倍総理による「原発事故はアンダーコントロールである」という発言が何を意味するのか。改めて痛みと悲しみを持って思わせられた。

2日目午後、空間線量計を情報センターより借り、ワゴン車にて「会津若松－いわき－国道6号を北上－仙台」のコースを移動した。国道6号を北上中、大熊町を通った。車内ですら、一時2.7マイクロシーベルト（毎時）を示した。また、浪江伝道所、小高伝道所に立ち寄った。浪江伝道所の横の草むらに『除染作業完了しました』という標識があった。しかし、そこの線量が0.4マイクロシーベルト（毎時）と、周辺のどこよりも高い数値であった。この事故を引き起こした我々の罪を思わないではいられなかった。

3日目、放射能問題支援対策室「いずみ」にて、スタッフの服部賢治氏より、話を聞いた。「事故はまだ終わっていない」、「支援として、なすべきことは何も変わらない」との言葉が、今回の研修での、総括的な言葉として胸に響いた。

（石井佑二報）

## 消息

**島津虔一氏**（隠退教師）

17年5月13日逝去、86歳。静岡県生まれ。57年東京神学大学大学院卒業。同年より芸西、初芝、佐倉、富里教会を牧会し07年隠退。遺族は妻・島津和子さん。

**藤田　基氏**（隠退教師）

17年5月16日逝去、86歳。愛媛県生まれ。53年関西学院大学卒業。54年より松山番町、三津、高浜教会を牧会し、松山東雲学園に務め、三津教会を牧会し04年隠退。遺族は妻・藤田千文さん。

**大津健一氏**（隠退教師）

17年6月22日逝去、73歳。大阪府生まれ。69年同志社大学大学院卒業。73年より倉敷、天城教会を牧会し、日本クリスチャンアカデミー、西陣市民センター、上賀茂教会を経てアジアキリスト教協議会、日本キリスト教協議会、日本クリスチャンアカデミー関東活動センター、アジア学院に務め、15年隠退。遺族は妻・大津恵子さん。

## 事務局報

教会通信先変更

葦のかご　〒336－0091
1　さいたま市緑区三室89－3－102

## 「NCC教育部平和教育資料センター」日本キリスト教会館2階に開設

日本日曜学校協会（NSSA）設立から110年となった5月、日本キリスト教会館教育部内に資料センターを開設しました。19世紀末から現在に至る教会教育資料を展示。日曜学校カード、教材、教案誌や、アジア太平洋戦時下の教案誌、戦後の人権教育資料など、平和教育の場として広く用いられるよう願っています。

◎開　館　月・水・金
午後12時30分～17時
◎入場料　¥200(中高生¥100)
URL http//nccj-edu.org

Title: 教団新報4865最終.eca Page: 4 Date: 2017/08/07 Mon 16:24:15



伝道報告

# 伝道のともしび

TOMOSHIBI

七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。…イエスは言われた。「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」
ルカによる福音書第10章17節～20節

## 地域の方々と共に

奥羽教区・江刺教会牧師 **邑原 宗男**

江刺教会は、岩手県奥州市江刺区にあります。広い岩手県南の内陸にあります。伝道の歴史は大正時代にさかのぼります。当時、日本浸礼教会盛町講義所として盛岡からの出張伝道でした。大正4年（1914年）足達信三郎牧師がタッピング宣教師の監督の下に「岩谷堂バプテスト教会」として創立しています。足達牧師の結婚後、岩谷堂での最初の幼稚園を創設し、地域に仕える働きをしていました。しかし、米国バプテスト伝道会社は、伝道不振を理由に援助を打ち切りました。自活のため、鋳物工場から南部鉄瓶を仕入れ、東京への行商する日々の中、お連れ合いが担われた岩谷堂幼稚園は地域に必要なものとなりました。牧師が過労で逝去後、町の運営へと移管し今日に至っています。戦時中、諸事情によりこの教会は、解散させられています。

1947年岩谷堂にいた信徒たちは水沢教会に助けを求めて集会を再開しました。まだ教区などの承認を得る前に「岩谷堂伝道所」の看板を掲げ、正式な手続きに向けて準備をし、1955年江刺伝道所を開設し、1957年江刺保育園を開設しています。この施設のために信徒一同は奉仕の精神で地域に仕えました。そして1965年社会福祉法人化し今日に至っています。

また、現在地の礼拝堂建築後、礼拝堂を利用して、1966年に聖愛ベビーホームを設立し、同時に第二種教会設立しました。このように地域に仕える幼児教育・保育の働きを教会は担いました。聖愛ベビーホームは1978年社会福祉法人聖愛育成会を設立し、幼児と老人への総合福祉事業を担って、今日に至っています。

このように教会は、地域の幼児施設を生み出す働きを担いました。しかし、教会の事業から切り離す形での法人化が進められることにより、施設事業は充実していきましたが、教会は地域との関わりが希薄になりました。

ただ、この教会の歴史は、地域と共に歩むことを大切にしていました。小職が赴任した2004年以降、近隣の方々との交わりを通して、今まで教会の中に一度も足を踏み入れたことのない方々に礼拝堂や集会室を利用していただくことになりました。

2011年の東日本大地震により被災した礼拝堂の建て替え中の2016年度も、被災牧師館再建として取得した隣家で町内の班活動を継続しました。近隣の方々は再建された礼拝堂献堂式には、班全戸から出席し、喜びを共にし、献堂礼拝を奉げました。近隣の方々は「新しい礼拝堂でも一緒に食事会などしていいの」と心配しています。でも新礼拝堂設計の時に、誰でも利用しやすいように広い厨房や、庭に向けて開放できるガラス戸や、仕切られている戸をあけ放つと広いホールになるようにしました。また子育て支援の会場にも利用できるよう工夫しました。また桜の季節にはライトアップして、観桜会が町内の方々によって行われています。

主イエス・キリストが仕えられたように、この地域を愛し、共に歩む業の一端を担わせていただきたいと教会員一同祈っています。そのために益々礼拝堂が用いられるようにと祈っています。

写真下、2016年の町内会の食事会

## メソジスト関係学校国際連盟メキシコ大会

「アイアムスク」なる言葉が頻繁に飛び交う場が、メキシコの古都プエブラの、マデロ大学に出現した。それは2017年5月27日～31日、メソジスト関係学校国際連盟（略称IAMSCU）世界大会であった。大会テーマは、隣国大統領の公約を意識し「壁を崩す－平和と癒しと人間性回復への道のり」。学校での取り組みや教育信念の発表を、200名を超える出席者一同が耳を傾けるという伝統的行事で、休憩時間や食事での交流から参加者同士の関係作りが発展していく。

IAMSCU設立は1991年。2年後に青山学院で開催された理事会で3年毎の世界大会開催を決議。3年前の前回は広島女学院で開催し、今回は8度目。集まったのは若い世代の教育活動に熱心な、高校校長、大学学長や宗教主任、神学校校長らである。多くは博士号取得者で、信仰深く献身的、また人間味溢れる参加者であった。

ジョン・ウェスレーは、野外説教等を通して教会を立ち上げると学校を併設する形で貧しい労働者の子弟に質の高い教育を施した。その伝統が今、IAMSCU世界大会として花開いている。現地企業の高額献金を得て大会は一層豊かなものになった。

日本からの参加者は青山学院、弘前学院、山梨英和学院、福岡女学院、活水学院、そして日本基督教団事務局の6団体8名に加え、合同メソジスト教会高等教育局で永く局長特別補佐を務めた山田賢二郎博士夫妻であった。山田氏の尽力で支援金が5名に支給された。教団の役割は①日本からの参加呼びかけ、②セミナー発表、③海外諸学校との関係作り、④宣教師候補者探しだった。

2018年11月1～4日、インド・ラクナウのイザベラ・ソバーン大学でアジア部会を開催する。日本の非メソジスト系学校からも参加が歓迎される。それに先立ち同年3月、青山学院にて研究シンポジウムを予定している。

（髙田輝樹報）

（写真提供・マデロ大学）

## ひとときに

### 松本 三男さん

### バングラデシュの子どもたちへの愛

松本三男さんは、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（マタイによる福音書7章12節）を心に刻んで歩んできた。小学生の頃、夜行列車の一人旅で、高崎から同席した宣教師より一冊の聖書を手渡されたことが御言葉との出会いである。

約20年前、決断を与えられ、世界最貧国のひとつ、バングラデシュの子どもたちのための支援を開始。黒板に始まり、奨学金、文房具、日用雑貨を贈り、学校を建てた。現地訪問の際には農業指導、子どもの家庭訪問をし、食前には必ずお祈りをする。

人口の9割がイスラム教の国で、キリスト者であることを宣言することは勇気がいることである。隣人を愛する愛がなければ、行うことはできない。

始まりは、一人の留学生との出会いであった。貧しい子どもたちのために、教育の施設を建設したい。その夢と祈りが、実現する。最初は数名の有志による計画であった。忍耐の強いられる過酷な長期計画ゆえに、最終的に残留したのは松本三男さん一人であった。

2005年からバングラデシュに小学校を建てる活動を開始し、2008年イラスプール村に小学校を開校することができた。2016年には中学校を開校し、小中あわせ現在250人の生徒が学んでいる。

「私の人生に、主が与えてくださったミッション」だと語り、健康が続く限り、子どもたちの学びの灯を絶やさず続けたいと願う。

これまでに7回、バングラデシュを訪問。約50キロの文房具・日用品を2回、荷物として携えていった。「主を愛し、隣人を愛しなさい」との主のご委託に応える働きに、信仰者の賜物が用いられている。

1941年、水戸市生まれ。北東京ルーテル伝道所（現・竹の塚ルーテル教会）にて受洗。日本基督教団 羽咋教会員。

6月5日教団教区総会議長会を開催した。各教区の議長が、自己紹介を兼ねて教区の報告をしてくださった。東中国教区・大塚忍議長はその報告の中で、教会員1名の総社教会で2名の受洗者と1名の転入会があり、この出来事を教区の喜びとして報告くださった。

早速、総社教会代務者の嵐護牧師に電話して、その様子をお聞きした。総社教会の礼拝は日曜日の午後行われているということであった。総社教会の洗礼式と転入会式に予想を超える参加者があった。岡山県中部地区（8教会）の教会から27名が出席し、コーヒーとケーキが足りないと喜びの悲鳴を上げるほどだったとのこと。27名のうち教師は3名、24名が信徒たちだ。総社教会に受洗者が与えられると聞いて、中部地区の教会の信徒たちが駆け付けた。

### 嬉しい悲鳴－ケーキが足りない－教会員1名の教会が沸いた

洗礼者が与えられた喜びは総社教会だけの喜びではない、中部地区8教会の大きな喜びであり、教区の喜びとなった。

そして、今、総社教会の喜びは教団の喜びとなった。

自分の教会で受洗者が与えられなくても、隣の教会で与えられたことを喜ぶ、地区全体で喜ぶ、教区で喜ぶ、そして、教団で喜ぶ。一つの魂が救われる喜びは、その教会の喜びに留まらない。何よりも「大きな喜びが天にある」（ルカ15章7節）。私は、心躍る思いで総社教会の喜びを聞いた。

（教団総会議長 石橋秀雄）